
悪魔だったかどうかは分からない

米問屋のひ孫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔だったかどうかは分からない

【Nコード】

N0539G

【作者名】

米問屋のひ孫

【あらすじ】

異様な静けさに支配された晩餐会。ラスプーチンの生命力と暗殺者の戦いがすでに始まっていた。

静かに晩餐会は進んでいた。

天井で煌めくシャンデリア。華麗な金細工の施された重そうな燭台。その蠟燭の炎は全く動かない。

列席しているのは皆、若い貴族や高級官僚達だが、その中に一人だけ黒い僧服を着た奇妙な男が交じっていた。その男に全員ちらちらと視線を走らせている。男は全く気にした様子を見せない。

しばらくすると、主催者らしき男を非難するように冷たい視線が注がれ始めた。彼の優男らしい顔はすでに青くなっている。が、僧服の男は全く気に留めてもしていないようだ。黙々と食事を続けている。

「ちよつと失礼」

彼は立ち上がって厨房へ行った。

「料理人、ちゃんと入れたのか？」

さっきの青さはどこへやら、彼の顔は真っ赤になっている。

料理人は白い粉の入っている小瓶を見せた。

「四分の一は入れましたよ。ユスポフ様。ごらんの通り」

ユスポフはうむと唸った。

「まさか、まさかそんなことは無かろう。次のワインに残り全部放り込め。分かったな」

彼は言い捨てて厨房から出ていった。料理人は感心したようにつぶやいた。

「あの生臭坊主、精力が強いだけあるなあ。俺にや、乱交パーティーなんて無理だもんね」

僧服の男はワインを一口に飲み干した。髭に付いたワインを拭いた。

「何だかスパイシーなワインですな。もしよろしければ後で銘柄を教えていただきたい。それはともかく、食後の祈祷をしたいのですが、祭壇はどこですか」

ユスポフは真つ青になった。

（青酸カリがスパイシー？ そんな馬鹿な）

「私が案内しましょう。祭壇は地下室にありますので」

ユスポフは食後の祈りをしている男の背中を見下ろしながら考えた。

（青酸カリが効かない特殊体質なのか？ よしんばそうだったとしても……）

ユスポフの手は腰に伸びた。

「死ねえっ！ ラスプーチン！」

ユスポフは叫びざまにナガンM一八九五拳銃で撃った。リボルバーが一回転した。

手が震えていたのか何発かは外れて祭壇の燭台を砕いたが、残りの四、五発は命中した。ことに一発はラスプーチンの頭を貫通し、あたりを赤い血と白っぽい脳漿で汚した。

ラスプーチンはばったりと倒れた。が、ううと呻いたかと思うと、ゆらりと立ち上がった。ユスポフの手から拳銃が滑り落ちた。

「え、え？ ううう、うわああああ！」

悲鳴を上げて二階へと逃げるユスポフの背中に向かって、復活したラスプーチンは猛獣のように咆哮した。

下の階の銃声を聞いて全員がにやりと笑った。が、悲鳴と共に誰かが階段をかけがって来る音を聞いて、おやという顔をした。

扉が開いてユスポフが駆け込んでくる。

「ユスポフどうしたんだ？」

「死なない！ 襲ってくる！」

彼らは顔を見合わせた。が、すぐに何事かを分からせるものがやつ

て来た。

全員の顔が真っ青になった。ユスポフの後から入ってきた、血まみれの大男は紛れも無くラスプーチンだったからだ。額には花のようには開いた傷口がある。

主賓のドミトリー大公が例の大きな燭台を投げつけたが、ラスプーチンはそれをものともせず突進した。大公は小さく「ひいっ」と叫んで部屋の隅に逃げた。

大公に逃げられたラスプーチンは別の男に飛びかかった。

男は持っていたステッキをめったやたらと振り回した。ラスプーチンの横っ面に重い握り手が直撃した。血と歯が飛んだ。しかし彼は死ななかった。

その男の足を引っつかみかじりついた

「助けてくれ！ 足、足に！」

男はステッキのとがった方で彼の頭を突いた。いくらか刺さって、ステッキを赤く染めた。

だがそれでも死なない。

ステッキを振り回す男から逃れると、机の上によじ登って叫んだ。「わしは死なぬ！ 貴様らに神の子は殺せぬ！」

その威圧感に一同圧倒されたかのようにだったが、冷静なドミトリー大公はラスプーチンが部屋の中央にいるのに気付いた。上には巨大なシャンデリアがある。

「おいセルゲイ！ シャンデリアを落とせ！」

「は、はい！」

セルゲイと呼ばれた若い男がシャンデリアの根本に四、五発銃弾をたたき込んだ。

シャンデリアはラスプーチンを押しつぶし、机に大穴を開けて二階の床を盛大に揺らした。血があたり一面に飛び散る。

しかし、ほっとしたのもつかの間、シャンデリアを押しつけて彼

がまたもや立ち上がった。

「わあああつ！　ば、化け物！」

誰かが叫ぶと、ドミトリー大公、ユスポフ公爵を先頭に皆は一散に逃げ出し、赤じゅうたんの敷かれた大階段を大騒ぎしながら駆け降りた。

その後ろを吼えながらラスプーチン、いやその残骸が追いかける。階段の中ほどでそれは転んだ。一階まで転がり落ちる。

しんがりを走っていた男がそれに気付き、持っていたステッキで思いきり殴りつけた。骨が折れたかのような鈍い音がした。

こうなれば占めたものだ。

従者が気を利かしてじゅうたんで簀巻きにし、寄ってたかってステッキで殴り、蹴飛ばした。

とどめにとサーベルでめった刺しにし、ネヴァ川まで運んだ。

凍りついたネヴァ川の氷に穴を空け、簀巻きにされたラスプーチンを投げ込んだ。

三日後、ラスプーチンの溺死体が発見された。

（後書き）

オカルトじみたラスプーチンの暗殺をもうちょっとオカルト風にしてみました。と言ってもあまりうまくいかなかったのですが。修業したらもう一度挑戦しようかなと。

感想、批評などございましたら何卒よろしく願います。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0539g/>

悪魔だったかどうかは分からない

2010年10月8日15時50分発行